

# 令和7年度版「学力向上ポータルフォリオ(学校版)」【宮原小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	本年度、おおむね確立することができた書き込み式ドリルやドリルパーク、学習アプリケーションの活用を通して、一人ひとりの課題に合った学習に継続して取り組めるようにしていく。また、家庭との連携も図りながら、児童が主体的にどのツールで学ぶかを選べるようにしていく。 教職員がさらに、積極的に1人1台端末を活用し、自立した学び手を育成することを目指した児童主体の授業を実践できるようにする。また、授業実践の成果と課題を共有するための環境整備を行う。
思考・判断・表現	本年度、「評価規準を示すこと」については挑戦してきたが、継続して実施することに課題がみられることから、学校全体で「学習のルール」の中に「学び方」を盛り込んでいく。また、振り返りの質の向上について、工夫と実践を行っていく。 また、デザインマップにおいて学年で重点的に取り組む単元を決め、校内で共通理解をして学習指導を行っていく。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 国語「話すこと・聞くこと」「読むこと」 算数「数と計算」「データの活用」 <指導上の課題> 個人差が大きい。個に応じた指導を充実させていく必要がある。基礎学力定着に向けた反復や振り返りの時間を十分に確保する必要がある。	⇒ 書き込み式ドリルやドリルパーク、学習アプリケーションの活用を通して、一人ひとりの課題に合った学習を進めていくことができるよう指導する【週に1度】。 ・1人1台端末を活用し、自立した学び手を育成することを目指した授業を行い、成果と課題を共有する【学期に1度程度】。
思考・判断・表現	<学習上の課題> 国語「話すこと・聞くこと」「読むこと」 算数「数と計算」「図形」変化と関係 <指導上の課題> 個人差が大きい。個に応じた指導を充実させていく必要がある。児童主体の学習活動の機会を十分に確保する必要がある。	⇒ 評価規準を児童に示すことで、児童主体の振り返りを充実させる【週に1回程度】。 ・ICTを効果的に活用し、児童の「わかった・できた・楽しい」を引き出す。また、魅力ある導入や必要感のある課題設定、解決の見通しをもって自力解決する場面の設定を行う【週に1回程度】。

⑤	評価(※)	調査結果	学力向上策の実施状況
知識・技能	B		年間を通じて、書き込み式ドリルやドリルパーク、学習アプリケーションの活用を通して、一人ひとりの課題に合った学習に継続して取り組ませることができた。どのツールで学ぶかを児童が主体的に選んで学ぶことができるようにしていきたい。 年間を通じて、積極的に1人1台端末を活用し、自立した学び手を育成することを目指した児童主体の授業を行うことができた。また、公開授業を10回以上実施することができた。
思考・判断・表現	B		年間を通じて、週に1度程度は評価規準を児童に示すことはおおむねできているが、学校全体で継続して実施できるようにしていきたい。また、どの学年でもICTを効果的に活用した授業を行うことができていく。 R7さいたま市学習状況調査「(教科)は好きですか。」に対する肯定的な回答の割合が市平均に対して低い教科も見られる。必要感のある課題設定、課題を主体的に解決する場面を設定する取組を充実させていくことが課題である。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	令和7年度全国学力・学習状況調査の「知識・技能」において、全国(公立)の平均正答率と比較したところ、国語、算数、理科とも上回る結果であった。国語においては、言葉の変化や世代による言葉の違いに気付く問題で、課題が見られた。引き続き、朝学習や授業において、ワークシートやドリルパーク等を活用し、言葉の特徴や使い方等の基本的な学習の反復・習熟に取り組んでいく。
思考・判断・表現	令和7年度全国学力・学習状況調査の「思考・判断・表現」において、全国(公立)の平均正答率と比較したところ、国語、算数、理科とも上回る結果であった。特に、国語の「話すこと・聞くこと」に関する問題で、目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができるかどうかをみる問題において、正答率が全国(公立)比べて、高い結果であった。全教育課程における言語活動の充実が少しずつ成果として表れている。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語では、言葉の特徴や使い方に関する問題において課題がみられた。解答類型を見てみると、漢字を文中で正しく使うことができていない児童が多く、基礎学力に課題があると考えられる。算数では、「数と計算」に課題がみられた。ドリルパークや復習用類似問題等を活用して基礎的・基本的な知識・技能を強化していくことを教職員間で共通理解した。 児童質問「課題の解決に向け、自分で考え、自分から取り組んでいるか」や「自分に合った教え方、教材、学習時間であったか」に対する肯定的な回答の割合が低い傾向が見られた。児童主体の個別最適な学びを進め、児童の実感としての伸びを感じられるよう、教職員の研修を積んでいく。
思考・判断・表現	国語の領域「話すこと・聞くこと」において課題がみられた。相手に伝えるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えることに課題があると考えられる。 算数では、数量関係の場面と図を関連付ける問題や体積や円周を求める問題の平均正答率が低く、課題が見られた。なぜこのような答えになるのかを説明し合ったり、確認し合ったりする活動が不足していることが考えられる。話し合う活動を増やしたり、考え方を全体で確認したりして定着へと結び付けていきたい。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	・朝自習・授業時に、書き込み式ドリルやドリルパーク、学習アプリケーションを活用して、一人ひとりの課題に合った漢字や基本的な計算等の反復・習熟に取り組むことができた。(週に1度以上) ・1学期は、自立した学び手を育成することを目指し、教師一人ひとりが研究、計画を立案することができた。2・3学期に、研究・公開授業を行い、成果と課題を共有する。	変更なし ・1人1台端末を活用し、自立した学び手を育成することを目指した授業を行い、成果と課題を共有する【学年で年に1度程度】。
思考・判断・表現	B	・週に1回以上の振り返りには取り組むことができたが、評価規準を児童に示すことについては、学級によって差が見られる。 ・ICTを効果的に活用した授業は、6割程度であった。単元の中で1回以上位置付けるなど、さらに効果的な活用を推進していけるよう工夫していく。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)